

うみほし時間

昨日・今日・明日
うみほし公園のすてきな時間をお届けします

アーティストのリッカルドさん、ムツサさん うみほし公園で竹のアートに挑戦

秋に開催した「宮津・竹の学校 国際ワークショップ (iBart 2013)」では、イタリアからリッカルドさん、セネガルからムツサさんという二人のアーティストをうみほし公園に招待しました。二人の挑戦と世界を舞台にして学ぶことについてうかがいました。



リッカルド・ピローパノ

わたしはイタリアのミラノから来ました。放置竹林の問題についてパートナーのマルタと話し合っって考え、「senza terra (大地無くして)」という作品を作りました。つないだ2本の

竹が浮いて横たわったような作品で、それに合わせて日本の庭師の園三さんが白砂の庭を作ってくれました。マルタは来日できず残念でしたが、わたしたちはつねに環境との対話から作品を生み出すことを目指し、互いのアイデアをぶつけて新しいイメージを探ります。

竹を初めて見た時は、しやなかで女性が踊っているようなイメージでした。宮津の人たちとも話し合っって、竹の命と自然をコンセプトアートとして表現しました。竹を支えるフレームは、後藤鉄工さんに協力してもらいました。



「senza terra(大地無くして)」

「学び」について、わたしの先生といえるのはアーティストのヨーゼフ・ボイスです。人間の問題を示唆したアートで、彼の作品には多大なインスピレーションを受けました。それからリチャード・セラも好きで、とりわけ彼の作品の造形が好きです。また、現在マルタがパリで師事している川俣正は、普通の素材を使っているにもかかわらず、それを集めて大きなものを作るところに惹かれます。ヴェルサイユにある果物の箱を使った彼の作品はすばらしいと思います。

これまで旅した国は、セネガル、日本、ドイツ、スペイン、フランス、ポルトガル、エストニア、イギリスなどです。旅をすると心が開かれます。異なる経験が、わたしにさまざまなことを教えてくれ、自由になります。日本はとりわけ気に入っています。ぜひ1年ぐらい住んでアートを制作したいですね！

ムツサ・トラオレ

わたしはセネガルのダカールで、芸術的な家庭に育ちました。アート制作と同時にエスパス・メディナというアートの拠点を主宰しています。わたしの家は海が近く、魚は漁師から新鮮なのを買って食べています。セネガルはバオバブの木も有名で、大きくて大事にされています。

わたしの作品は「竹の王様の帰還」といいます。竹を見るのは初めてでしたが、公園で見た竹ばつくりで遊ぶ子どもたちの様子がヒントになりました。竹の王様を待つ王座は希望を表しています。イスは象徴的な存在で、人々が集まり、そこに座ると、今の宮津や日本が眺められます。わたしは、日本の人たちの他者への敬意や笑顔、立場にとらわれない平等な様子など、多くのことを教わりました。同時に、それらを引き継ぎ、若い国を作る次の世代の重要性も感じています。わたしは、アートを通じて子どものために物語を作るのが好きです。王座には、この先、小さな王様は帰ってこないかもしれませんが、人々が「エスプリ(フランス語で精神、知性、心を表す言葉)」を求める限り、大きな王様は必ず帰ってきます。



「竹の王様の帰還」

文化の無い国には香りがありません。日本は尊敬すべき国としてずっとあってほしいと願っています。竹の王座には、アフリカに伝わる伝統的なシンボルを飾りに入れました。これらは、それぞれに意味があります。また、わたしは考えるより先に手が動き、何かを目にすると、つい何かを作りはじめる癖があります。だから、わたしは先生という存在を意識したことはありません。時折、私の作品をピカソみたいだと言う人がいますが、そういう時はピカソがわたしを真似しているのだと言ってやります(笑)。

宮津・竹の学校 国際ワークショップ



公園だより

見えない風景が見える

公園から北東方面の海に浮かぶ冠島と脊島。
空気の澄んだ日にだけ、島の向こうに遠く浮かび上がるように見える景色があります。冬の季節には雪を抱いている山並みが見えることも。不思議な景色の正体は、石川県の白山連峰。公園から白山までは直線距離にして150kmほど。2000m級の山々が浮かび上がる迫力、美しさ、そして、肉眼では見えるのに、写真にはとらえられないもどかしさ。見えないけれど、写らないけれど、そこに確かにあるもの。公園にはそんな宝物があります。



雪の上の足跡



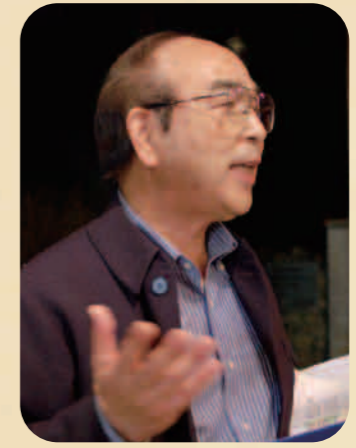
うみほし公園の仲間たち



丹後語り部の会 (地球デザインスクール理事)

くぼ よしやす 久保 善康

丹後語り部の会は平成21年より活動し、現在メンバーは26人。語りのテーマは丹後の歴史・自然・人・食と多岐に渡り、観光の方にお話しをしたり、テレビ・ラジオにも出演したりしています。



地元の神様トヨケノオオカミについて話す

わたしは間人ガニの話や、地元の話もします。丹後弁の「あんなあ」という優しい昔語りで心に訴えられたらいいですね。今は、3月22日に京丹後市で開催される「海の京都 “全国語り部フェスティバル”」の準備で頑張っています。

丹後七姫の一人、細川ガラシャの生誕450年記念企画も継続中。「もっと知りたい、愛したい、伝えたい私の丹後」。応援よろしくお願ひします。

